

祇園で学んだ心得は ビジネスの世界にも通じます

置屋を廃業した岩崎さんは、その後、伴侶を通じて日本画の修復を学んだ。華やかな祇園とは対局にある静寂の作業だが、自分では修復こそ天職と思うのだそう。そして、そこで知り合ったさまざまな職人たちの苦労と窮状を知り、岩崎さんはNPOを立ち上げた。文科省の外郭団体のような名称の法人は、来年、設立10年を迎える。どこまでも筋を通して生きる岩崎さんの祇園は、一文字を差し替えた「義園」として続いているのかもしれない。(本紙主幹・奥田喜久男)



「ぶぶ漬けでもどうぞ？」は最大のおもてなし

奥田 結果として廃業はされましたが、祇園という世界はいかがでしたか。

岩崎 舞妓、芸妓をして良かったなと思うのは、お酒をお召しになるとお客様は割と真実を話して下さることです。小座敷にお一人で見えた時とか、「おねえさんにこんなふうに言われたけど、どう思われます？」と私が聞くと、「そら、あんたが悪い」とたしなめられたり…。

奥田 本音で対応してくれた。

岩崎 そうです。逆にお客様が奥様と揉めた時は、

送っていくから一緒に謝りましょう、というようなことがよくありました。奥様にもそれをちゃんと分かっていたいたりして。

奥田 お座敷というと、もっと派手なイメージがあります。

岩崎 テレビや映画では、派手などんちゃん騒ぎが当り前のように描かれますけど、そうやあらしまへんねえ。

奥田 いつもどんちゃん騒ぎをしているわけではない、と。

岩崎 楽しいのはよろしおすけど、いつもいつもとは違いまっせ。お客様によっては、「それはちょっと不細工どすね」と言わしてもらっていました。

奥田 岩崎さんのおっしゃる不細工というのは、どう

いう意味ですか。

岩崎 いつの世にも変わらない常識的な考え方というのがありますでしょ。そこから逸脱するのは、かなり不細工になります。要するに、人の道を外れるということ。私たちは小さい頃、道を外すと、おばあさんとかお師匠さんとかが、びしっと叱ってくれました。

奥田 確かに。よく叱られましたね。

岩崎 それで泣きまっしやろ。そうすると「自分が悪いと思てへんさかい涙が出んにゃ」とか言われて、「ああ、そうか」と自分で分かる。そういう教わり方をしてきました。

奥田 要はしつけですかね。

岩崎 家庭の教育やと思います。

奥田 もう一つ教えてもらっていいですか。京都に



PROFILE 1949年生まれ。京都市出身。置屋を営む女将に見初められ、将来の跡取りとして4歳で養女となり、15歳で祇園甲部の舞妓としてデビュー。21歳で芸妓となり、6年連続売上ナンバーワンを達成、お座敷以外にも広告やCMなどで活躍する。29歳で現役を引退後、日本画家の佐藤基一郎氏と結婚。日本画や油絵の修復を学び生業とする傍ら、2001年に自伝『芸妓峰子の花いくさ』を出版。同書は日本図書館協会選定図書となる。02年には米国で『Geisha, a Life』を発売しベストセラーに。09年『日本文化芸術国際振興協議会』を立ち上げ、日本の伝統文化を正しく継承するために人材の育成や情報の発信に動いている。

構成・文 / 浅井美江
text by Mie Asai
撮影 / 津島隆雄
photo by Takao Tsushima
2018.6.20 / 京都南禅寺「菊水」にて

取材に行くと言ったら、お茶漬けが出たら気をつけてと言われたんですが、どういう意味ですか。

岩崎 京都はその昔、生ものがなくて、お漬け物や佃煮が命やったんです。「ぶぶ漬け(お茶漬け)でもどうです?」と言うのは自分たちの最大のおもてなし。それを勧めてもらえるというのはすごいことやと思います。お茶漬けは命、大切なものですから。

奥田 もう帰れということではないんですね。

岩崎 京都というのは長い歴史がある都なんですが、古くから京都に住んでる人は、割と竹を割ったような人が多いんです。もし帰ってほしかったら、私も私の周りもはっきり言います。お茶漬けが出たら帰れとか、どうしてそんなふうに伝わるのか、私にはちょっと分かりません。

奥田 そうしたことを伝えるために、NPOを立ち上げられました。

岩崎 特定非営利活動法人「日本文化芸術国際振興協議会」のことですか。

奥田 文科省の外郭団体みたいな名前ですね。

岩崎 わざとまぎらわしくつけました(笑)

奥田 設立はいつでした?

岩崎 2009年の2月。来年で10年になります。ちゃんと内閣府のNPOホームページにも掲載されています。

奥田 定款には、「この法人は、後継者の枯渇により衰退の虞(おそれ)のある日本の伝統文化を正しく継承するために、それに係る人材を広く求め、育成するとともに、国内外にその文化を伝承することを主たる目的とする。また、人的インフラを整備し、各団体、企業、行政、個人、アーティストなど、あらゆる人・組織・団体に門を大きく開き、知恵とチカラを集結させ、目的の実現を目指して活動を続けることを目的とする」とあります。

日本の文化を語れないと世界とはつき合えない

岩崎 自分で日本画の修復を手掛けて知りましかけど、表具屋さん、お道具屋さん、截金(きりかね)屋さんなど、日本の伝統文化の職人さんたちはたくさんおいでになるんですが、本業だけで食べていけるのはほんの一部の人だけ。ほとんどの人は食べていけずにアルバイトをしておられます。

奥田 それをなんとかしたいと。

岩崎 自分たちが食べて行けへんさかい、後継者を育てたいと思ってもできまへん。仕事自体の需要も少なくなってきているのに、なんや、ややこしい決まりもあって、ほんまに生きにくい。そういう人たちが一人でも食べられるようになればいいし、一人でもお弟子さんがとれるようになったらええのにと。奥田

具体的にはどういう活動をしておられるんですか。

岩崎 大勢の方を対象に、本物の京文化(日本伝統・

こぼれ話

「岩崎究香」と書いてスラスラ読める人がいるのだろうか。運勢の「気」とも言うのだろうか。究香は、姓名判断によって付けられた名前だ。文字そのものに生命が宿っていると考えるわけだ。「みねこ」と読む。以前の名前は「岩崎峰子」で、京都の祇園甲部で凛とした生き方を貫いた方だ。私と同じ年なので、半世紀ほど前の話だ。当時のことを数冊の書籍に記しておられる。祇園の名で通る独特の世界の話だけに興味深い。

当日は指定された南禅寺の料理旅館「菊水」でお会いました。タクシーの車窓から見る街並みは、雨が曇をしっかりと濡らし、霧にかすんだ山肌が目前に迫ってくる。狭い道を曲がるたびにヒヤヒヤする。「こちらです」と運転手に促されて降りる。玄関はシーンとしていた。奥に声をかけると、予想に反して今風の若い女性が現れた。スリッパを探してキョロキョロしていると、「どうぞ、そのままです」と。躊躇していると再び促されて、土足で

床を踏んだ。子どもの頃、かあちゃんに叱られたシーンを思い出して、一瞬、戸惑った。

「同じ年なんですね」。共通性をきっかけとして話が始まった。年明けに古希を迎える年代

にあっても、岩崎さんの生き様には、「10代」で培った資産の大きな存在を感じる。話題、所作、機転、居住まい、息遣いまでもがきつと岩崎峰子さんなのだ。ひよっとすると、私自身も10代のあの頃に身に付けたものが今の自分を形成しているのかもしれない、と思った。そうだ、時間をつくって70代の己を見直してみよう。



東京・目黒で開催されたイベントの様子。若手企業家や著名クリエイターが多く参加した。岩崎さんの講演のほか、ステージ上でお座敷遊びが体験できるコーナーも

お座敷文化)を体験していただく「和の心得講座 課外授業」から、こぢんまりした宴会風でお一人ずつから私に質問していただくというまで、いろいろです。

奥田 講座の開催は京都ですか。

岩崎 昨年の夏は東京の目黒雅叙園で開催しました。「昇る人生の課外授業 ～祇園から学ぶ日本人の心得～」というタイトルで。昇る人というのは優秀な人材という意味です。そういう人に共通する特徴や実際にお座敷であった出来事などを話させていただきました。

奥田 面白そうです。大勢集まりましたか。

岩崎 若手の企業家さんが100人くらい来てくれました。

奥田 盛況でしたね。若手というのは何歳くらい?

岩崎 30代から40代前半。20代の方もいらっしゃいました。

奥田 いろんな業種の方がおいでになりますね。呼び掛けはどうされていますか。

岩崎 幹事さんにやってもろてます。その時々によって幹事さんは変わりますけど。昨年の12月は京都の老舗料亭「瓢亭」さんでした。

奥田 その時のカリキュラムは?

岩崎 舞妓さん、芸妓さんをお呼びして衣装の成り立ちをひもといたり、着物と衣装の違いを説明したり。あとはお客様をもてなす時の心得みたいなことを。

奥田 若手の経営者にとっては、京都との距離を縮

めたいということでしょうか。

岩崎 それもあると思いますけど、皆さん、世界とお付き合いしてらっしゃるので、日本の文化を語れなければ話にならないということを身にしみておられるようです。

奥田 ああ、日本を知ろうということですね。

岩崎 あと、舞妓さんや芸妓さんたちの接客術や話術の力はすごいので、そこもコミュニケーションの勉強になると思います。

奥田 NPOは伝統工芸の職人さんを救うこともありますが、自分がこれまで教わったことを還元しようということもあるのでは?

岩崎 まあ、ちょっとでもお役に立てばとは思ってます。祇園には一流の方々がいらしてましたから、そこで見聞きしたことはビジネスの世界にも通じる場所があるでしょうね。

奥田 今日は興味深いお話をありがとうございました。次回の心得講座が決まったらぜひ教えてください。

BCNは「ものづくりの環」を支え育むメディア企業です



——「ものづくりの環」の詩——

ものを使う人がいます
ものを売る人がいます
ものをつくる人がいます

いつの時代も私たちは生活の心地よさを求めます
その意(おもい)が新しいものを生みます

使う人、売る人、つくる人——
私たちは「ものづくりの環」のなかで
すべての人の心が豊かになることを願っています

株式会社 BCN

<http://www.bcn.co.jp/>

※この記事は、近く週刊BCN+の「千人回峰 人ありて我あり」で公開する予定です。
<https://www.weeklybcn.com/journal/hitoarite/>